

今村 純子

IMAMURA Junko

はじめに

フロベール(1821-1880)の『ボヴァリー夫人』(1856)は、「地方風俗」との副題を持ち、19世紀の一地方のブルジョア社会に生きる一女性の「愛の陥穽」の軌跡を描いた小説である。そして、フロベールは、この作品をもって、彼の意に反してリアリズム[自然主義／写実主義]の父と呼ばれることとなった。このことは、「リアリズムとは一体何であるのか？」という問いをわたしたちに突き付けてくることになるであろう。なぜなら、フロベールのリアリズムの背景には、とりわけ、次の二点が指摘されると思われるからである。

第一に、『ボヴァリー夫人』は、ボードレールの『悪の華』と同様に、風俗紊乱、宗教冒瀆のかどで起訴され、裁判沙汰になったものであるが、後者が有罪になったのに対し、前者は無罪となったという経緯をもつということである。このことは、フロベールが主人公ボヴァリー夫人であるエマという特殊で個別な人格の「愛の陥穽」の軌跡を描きながら、時間・空間を超えた普遍的真理、いいかえれば、時間・空間に釘付けになることによって時間・空間を超出する真理を描きえているといえるであろう。

第二に、フロベールは、「わたしの可哀想なボヴァリーは、おそらくいまこのときに、フランス中の多くの村々でそれぞれに苦しみ、涙を流しているにちがいない」<sup>1</sup>と述べる一方で、「ボヴァリー夫人はわたしなのです(Madame Bovary, c'est moi)」という明言を残しているということである。『ボヴァリー夫人』は、フロベールのルイズ・コレとの恋愛をモデルにし、また、この恋愛の進行中に書かれたものである。実際、彼女に宛てた手紙における記述と小説における描写が正確に一致する箇所は驚くほど多い。このことは、フロベールが、徹底的に己れを掘るということで、普遍的真理を描き出したということを意味するであろう。しかし、ここで、フロベールは、自らが女性になるという「性的差異」の横断をしている。このことは、フロベールの想像力が「性的差異」という「他者」との絶対的分断を乗り越え、透視不可能な「他者」を透視しえたというに留まらない。フロベールは、当時の女性同様に、徹底的に社会的抑圧を受け、かれの自我はいちど完全に死んだのである。『ボヴァリー夫人』はひとたび己れが死に、そして再生した己れによって書かれた小説なのである。

それゆえ、フロベールは、『ボヴァリー夫人』がベストセラーとなり、自分がリアリズムの父と呼ばれることなど全く望んでいなかったのである。かれの文学が有する「言語の美」の「質」が、分かるひとだけに読んでほしく、分からないひとには読んでほしくなかったのである。かれの「言語の美」は、作者である己れが死に、己れが対象と一体化した彼方において、「言語」が「存在」そのものになることによってしか生じえない。そして、医学解剖に比せられる現実の正確な描写は、実は、宇宙を支配する必然性の法則の厳密さと単純さを映し出す鏡にほかならないのである。こうして、けっして「言語」に還元されえない「意味」は、「言語の美」を通して映し出される。「だれだって、自分の欲望や考えや苦

しみをちゃんと正確に表現できるものでもないし、それに人間の言葉はひび割れた鍋みみたいなもので、これをたたいて星を感動させようと思っても、熊を踊らすメロディーしか出せないのである」(259/260)<sup>2</sup>。

不朽の名作となっている『ボヴァリー夫人』を解釈することは、それこそ「X 氏」の数だけ可能であろう。だが、わたしたちがなすべきことは、この書を解釈することではない。そうではなく、この書を認識しなければならないのである。もし、騒音に耳を貸さず、ひとり静かにフロベールの文学というリアリティに向き合うならば、わたしたちひとりひとりが、この書を認識しうるのである。そして、この可能性の抜けをかれの文学が有することに、フロベールがリアリズムの父たる所以が求められなければならないのである。

わたしたちは、主人公エマの「愛の陥穽」の軌跡を見定め、その「仮象」を剥ぎ取らなければならない。そのために、わたしたちも、サルトル、ジラールといった哲学者たち同様に、「欲望」の観念に着目することになるであろう。しかし、精神分析の手法を斥け、欲望が「真実の愛」へと昇華する可能性、つまり、欲望が超越に与る可能性、ただこの一点にのみ着目したい。この可能性が扱かれるとき、「深い哲学は必ず一面に宗教的基盤を有し」<sup>3</sup>、「偉大な哲学はすべて宗教的である」<sup>4</sup> のと同様に、「深い文学」、「偉大な文学」も、また、「宗教的基盤」、「宗教性」と切り離せないことが自ずから明らかになるであろう。

#### 一 「エマの感性的認識」

『ボヴァリー夫人』において、主人公エマは、「ともかく、自分が感じたことでなければ理解できず、型どおりにあらわれないものはなにも信じられない」(103/58)<sup>5</sup> 性向の持ち主として描かれている。だが、「感じたこと」によって得る認識が、自らがすでに内包する「型(forme)」に合致することは本来的にはありえない。そのために、エマの「感性的認識」は、独特の有り様を呈することになる。その様相を、わたしたちは、エマが少女時代を送った敬虔な修道院生活のうちに垣間見ることができる。彼女は、「病める小羊や鋭い矢につらぬかれた聖心や十字架に向う途中に倒れるいたわしいイエスが好きであり」(95/48)<sup>6</sup>、また、静かな田舎の生活に慣れていて彼女は、「嵐があるので海が好きだった。草木の緑はただそれが廃墟のここかしこに見られるときだけ愛した」(96/49)<sup>7</sup> のである。

「病める小羊」や「聖心」や十字架を背負う「イエス」は、極限の苦悩の直中にあるからこそ、彼女には愛おしく感じられるのであり、必然性の直中であってはじめて、「海」や「草木」は美しく感じられるのである。わたしたちは、自らが所有していない対象を欲望する。そして、その対象を所有するとき、欲望が解消すると同時に適意が得られる。しかし、対象が完全に自己同一するとき、その適意は消失してしまう。だが、ただひとつ、わたしたちの欲望が「苦悩」や「必然性」を付帯するとき、逆説的に、欲望が常に適意を保持し続ける可能性が見出されるのである。

このように、「廃墟の直中の草木」に比せられる、「暗闇の彼方の光」、「悲哀の河の底に沈んだ砂金」<sup>8</sup> といった、「苦悩の果ての美」という適意の有り様は、自らが内包する「型」とは無関係になされる「感性的認識」である。このとき、わたしたちの意識は、有限な「わたし」のうちにありながら、「わたし」を超えた無限への扉の接点に位置しているというであろう。

なぜ、彼女の意識は、このように、無限への扉の接点に位置しているのでしょうか。この問いに対する応答を、わたしたちは、彼女の現実を射ぬく透視力に求めることができる。シャルルとの結婚式を終え、トストに着いて、シャルル

がエマのために前妻の結婚の花束を納屋に隠すとき、エマは、「もし自分が死んだらあの花束[自分の結婚式の花束]をどうするのかしら、ぼんやりそんなことを考えるのだった」(92/44-45)<sup>9</sup>。有限で質料的な存在に留まるかぎり、彼女の透視力は、自らが内包する「型」を次々に打ち破り、けっして「感じること」において適意が得られない。それゆえ、彼女は、あらゆる「型」が捨象され、瞬間的に自らが形相そのもの、無そのものであることに触れる「苦悩の果ての美」による適意を渴望することになるのである。

ところで、エマが、「感性的認識」と「形式的確信」の一致を願うのは、いうまでもなく、彼女の意識が当時の女性の「性の抑圧」状態によって構成されているからである。彼女は、自分の性を、逃れられない「運命」の悲哀として、この物語のはじめからはっきりと認識している。だから、彼女には、「ジャンヌ・ダルク、エロイーズ、アニェス・ソレル、フェロニエールの美女、クレマンヌ・イゾールこうした女たちは歴史の大きな闇のうちに彗星のようにさんぜんとかがやいて見えた」(97/50)<sup>10</sup>のである。だが、こうした男性的意志により行動した歴史上の女性たちは、彼女自身の実際の生においては、「彗星」のような瞬間の閃光にすぎない。エマにおいて、常に、「女の意志は、かぶっている帽子の紐でとめたヴェールのように風のまにまにひるがえる」(153/115)<sup>11</sup> 偶然性に支配されており、「肉の弱さと法律上の従属」(153/115)<sup>12</sup>に縛られているのである。それゆえ、彼女は、「過去の自分のあらゆる無力であったことを希望でうめあわせする」(153/115)<sup>13</sup> ために、男の子が生まれることを切望するのであるが、生まれたのは女の子であり、運命はどこまでも彼女を翻弄してゆく。

わたしたちも、サルトルと共に、『ボヴァリー夫人』がフロベールのブルジョア嫌悪全てを投射した作品であると看做すのであれば、フロベールはブルジョアの一体何を嫌悪したのかを見定めなければなるまい。エマは、「苦悩の果ての美」という「感性的認識」を得ることが出来ない絶望を抱え、司祭のブルニジアン師に、心の薬を求めて会いに行く。「ああ、あたしにいてるのはこの世の薬ではございません」(177/147)<sup>14</sup>。しかし、物質的な貧困だけではなく、「ほかにもかわいそうな人間がいる」(178/149)<sup>15</sup> のに、そして、この司祭自ら「わしは魂の医者というわけで」(178/148)<sup>16</sup>、と自称しているのに、この司祭の述べる言葉全てが、あたかも移りゆく風景の様に、彼女の魂に直接触れてくるものが一つもない。それゆえ、唯一の望みをも絶たれたエマは、「人形が軸の上でくると回転するように踵をかえし」(180/151)<sup>17</sup>、教会をあとにする。

ブルニジアン師には、食べるに困ることのないエマの絶望は、ただの贅沢病としか映らない。そして、かれのこの観念は、彼女の実存との接触によってなんら変容を被ることがないのである。かれはエマを眼の前にしているのであるが、実際に息をし、苦悩し、歓喜するエマの生身の実存に出逢っていないのであり、また、出逢おうとしていないのである。そして、フロベールが嫌悪したブルジョアとは、現実を知覚し、思考する人間ではなく、はじめに「型」があって、その「型」に物事をあてはめて知覚しているかのように (als ob) 生きる、思考しているかのように生きる、「紋切り型」の人間のことにほかならない。そもそも、エマの絶望の源泉は、外観は善良で愛情深い夫のシャルルがこのブルジョアの典型的人物であることである。「シャルルの話は歩道のように平凡で、月並みな考えがふだん着のままそこを行列して行った」(101/54-55)<sup>18</sup>。エマにとって、人間の顔をした「事物」としか感じられない、「シャルルがそこにいる」というかれの存在の現前が、彼女に「吐き気」を催させるのである。

エマは、己れを救うために、彼女自身も、運命に従って「紋切り型」の生き方をしてみようと決意する。「自分の生活は北の窓しかない納屋のように冷たく、退屈という黙々とした蜘蛛が心の四すみに巣をはっている」(105/59)<sup>19</sup> のに、「エマは自分が正しいと信じている理論どおりに恋を感じようとつとめる」(103/58)<sup>20</sup> である。だが、「不在の恋」が、理論や概念といった「型」に従って「感じられる」はずがない。それゆえ、この意識の空転の連続は、彼女を精神の病に陥れてしまう<sup>21</sup>。

一方、なぜシャルルは「紋切り型」の生を享受できるのであろうか。それは、シャルルが、エマのように、「形式的確信」を「感性的認識」に一致させようとはしないからである。「毎夜、よく燃える暖炉の火、ちゃんとしたのできた食卓、やわらかな椅子、そして上品にうつくしく、いい香りのする衣装をつけた妻を見いだした」(121/79)<sup>22</sup>。暖炉や食卓や椅子や衣装といった「量的認識」は、「愛する」、「愛される」という、感じられ、生きられる「質的認識」とは本来まったく無縁のはずである。だが、シャルルは、「感性的認識」を括弧に入れて、美しい妻の実存の息遣いを、「いってみれば、かれの生活の小道にそってしきつめてある金の砂のようなもの」(121/80)<sup>23</sup>に還元することができるのである。こうして、「子供を授かる」という劇的な「量的認識」が、シャルルの生を完全に充溢させる。「これでもうなに一つ不足はない。人生の全部がすっかり経験できたのだ。そこでかれはじつに晴れやかな気持ちで人生の食卓に両腕をついた」(152/114)<sup>24</sup>。

「苦悩の果ての美」という「感性的認識」をその生の本質とする人間である主人公エマと、この認識が欠如している、あるいは、そもそも意味のないものであると看做している、「紋切り型」の生を享受する、夫のシャルルをはじめとする彼女を取り巻く登場人物たちが、彼女を「愛の陥穽」へと誘う。そして、実際に「愛の陥穽」を実行するのは、エマのような「感性的認識」[以下、「エマの感性的認識」と略]を本質としているかのようなふりをして彼女を籠絡する遊び人ロドルフと、瞬間的にはこの認識が中核を占めることもあるが、究極的には「形式的確信」に盲従することを選択するレオンである。次章においては、この三人が織り成すエマの「愛の陥穽」に光を当てることによって、欲望が「真実の愛」へと昇華する可能性を探究してみたい。

## 二 欲望から愛へ

「現実にある私」から「そうであってほしい私」へと己れを投企する有り様は「ボヴァリズム」と呼ばれている。そして、周知の「欲望の三角形」<sup>25</sup>を見抜いたジラールをはじめ多くの論者は、『ボヴァリー夫人』の登場人物すべてがこの現象に与っていると看做している。だが、実際には、「満たされない」魂が、「満たされた」ふりをしたり、「満たされない」ことを忘れようとしたり、「満たされない」ことを見つめようとしたりする。このように、「ボヴァリズム」は、様々な位相を有するものであるといえる。果たして、「エマの感性的認識」を生根幹にもつ人間は、いかなる魂の道程を歩むのであろうか。

エマの「ボヴァリズム」の様相は、エマの精神の病を案じたシャルルが、新しい土地への転居を決め、引っ越しの準備の際、針金が指をさしたのをきっかけに、己れを痛めつけた過去と決別するために、エマが結婚のブーケを暖炉の炎のなかに投げ捨てる象徴的行為に明示されている。「エマは花束を火中に投げ込んだ。それはかわいた藁よりはやく燃え上がった。やがて灰の上に真っ赤な叢のようになって、それがゆるゆるとくずれて行った。エマは焼けるのを見ていた。ボール紙の小さな芯がはげ、真鍮の針金はねじれ、飾り紐が溶けた。紙の花冠はかたくちんで黒い蝶のように炉の鉄板にそとゆらめいていたが、ついに煙突から飛び去ってしまった」(129/89)<sup>26</sup>。この象徴的描写は、エマの能動的／男性的性格を端的に示している。だが、一章ですでにみたように、彼女は、こうした能動的／男性的性格を持ちながら、己れの意志を発動できず、絶えず、男性の意志に隷属して生きなければならない、必然性の鎖から逃れることができない。それゆえ、彼女の行為には、その行動性にもかかわらず、行為の結果の責任を自らに帰す

ることができる「動機」がつねに欠如しているのである。

シャルルは、エマを田舎の父親の家から連れ出してくれる唯一の人物であった。だから、彼女はかれとの結婚を承諾するのである。しかし、結婚後、彼女は、「感性的認識」の意味を問うことのないシャルルに失望する。「男とはそんなものであってはならず、さまざまなことに秀でて、情熱のはげしさとか生活の洗練とか、あらゆる神秘的なことへの手引きをしてくれるものではないのか。ところで、この男はなに一つおしえてくれず、なにも知らず、なにも望んでいないのだ。かれは妻を幸福だと信じていた。そして、妻のほうでは、夫のこの落ち着きかた、少しの不安もない愚鈍さ、彼女があたえている幸福をさえ、うらめしく思った」(101/55)<sup>27</sup>。

そして、この絶望の奥底からの「欲望」が、「待つ」という受動的／女性的な衣を纏いつつエマの心のうちに沸き起こる。「心の奥底では、しかしなにかの出来事を待っていた。難破船の水夫のように、生活の孤独のうえに絶望した目をさまよさせつつ、はるか水平線の靄のうちに白い帆のあらわれるのを待っていた」(123/82)<sup>28</sup>。エマのこの「待望」を実現するかのような人物として、エマを誘惑する遊び人のロドルフが登場する。このロドルフとの恋愛において銘記しておくべきなのは、エマが自分を籠絡するロドルフの冷酷さにハッと気づく瞬間がたびたびあるということである。だが、この恋愛を凌駕する、彼女の欲望を満たす現実が到来しないかぎり、彼女の想像力は、この恋愛が真実であるかのような幻想を信じることへと自らの魂を強いるのである。

エマは、ロドルフの冷淡さに気づき、「恋愛よりもっと堅実なものにたよりたいとひたすら願っていた」(242/237)<sup>29</sup>ので、イポリットの彎足の手術をシャルルに勧め、この手術の成功を契機に夫を愛したいと願う。しかし、手術は失敗し、彼女の夫への失望は決定的なものとなる。すると、エマの想像力は、ロドルフとの恋愛へと一層のめり込むように、己れの魂を駆り立てる。だが、「満たされない」魂が、想像力の画策によって実際に「満たされる」ことはない。彼女の想像力は空転するばかりである。そして、行為の過激さが、「満たされる」ことの途上にあるとの錯覚を己れに信じ込ませようとする。ついには、己れが己れを破滅させることが「満たされる」条件であるかのごとくに、ロドルフとの駆け落ちという一点のみに、彼女の魂は集中することになる。このとき、エマが「わたしであること」を指示するものは、ロドルフとの恋愛の存在以外にはありえず、それゆえ、この恋愛の存在の純粋性を「信じること」へと、エマは己れの魂を駆り立てていくことを余儀無くされるのである。

だが、ロドルフはエマを捨て、彼女は絶望から瀕死の病に陥る。この「瀕死の病からの回復」と、新婚の頃にプラトニック・ラブの関係にあった「レオンとの恋愛」との振幅を調和するかのごとくに、すっかり自尊心を失い、弱り切った彼女の魂が、「宗教的確信」を抱く瞬間が介入される。「現世的な幸福のかわりにもっと大きなよろこびがあったのだ。すべての愛を超越したも一つの別の愛があり、それはとどえることなく、永久に大きくなっていくものなのだ」(282/292)<sup>30</sup>。このとき、エマは、「わたしがあること」が指示されることは無関係に、「わたしがあること」を超えた「もうひとつの愛」の存在を確かに感得している。有限で質料的な「わたし」を超えた無限への扉を完全に開け放っている。

だが、体力を回復し、レオンに偶然再会すると、「満たされない」魂を抱えるエマは、またもやレオンの誘惑に屈してしまう。だが、ロドルフとの恋愛の破局という疼く魂の古傷と、弱気なレオンとの恋愛において常に介在する「極端な、正体のつかめぬ、暗いなものか」(356/392)<sup>31</sup>が、ロドルフとの恋愛のときより、一層頻繁に、一層強烈に、エマに「虚無の到来」を余儀無くさせてしまう。そして、また、この「虚無の到来」を振り払うために、彼女は、ロドルフとの恋愛以上に、あらゆる虚飾の手段を用いて、この恋愛を「感じる」ことによって「信じる」ことへと己れの魂を駆り立てることになる。彼女は、恋愛の直中の情熱、つまり、特定の「他者」を「愛している」、また、特定の「他者」に「愛されている」という肉感なしには、「わたしがあること」を指示することができない。だが、実際には、この肉感は存在しない。存在しないからこそこの肉感を得ようとする衝動は、ついには一瞬の恍惚を求める破滅的衝動へと昇華せざるをえない。「あの男を、レ

オンのことを思った。このときこそ、自分を堪能させてくれるあの逢いびきを一度できたらもういっさいを投げうってよかった」(363/402)<sup>32</sup>。

そして、この一瞬への己れの投企は、破滅への投企にほかならないのであるから、この一瞬の恍惚のあとには、それ以前にもまして恐ろしい「虚無の到来」を免れ得ない。「どの微笑にも倦怠のあくびがかくされている。どのよこびにも呪いが、どの快樂にも嫌悪がかくされている。もっともしい接吻ですら、もっと大きな逸楽へのみたされぬ欲望を唇に残すばかり」(357/394)<sup>33</sup>。このとき、彼女は、少女時代から求めていた確かな真理が、実は、この世には存在しないということをはっきりと感得せざるをえない。そして、「虚無の深淵」を覗き込む際の不安と絶望が、「宗教的要求」を形成し、有限な彼女の魂のうちに、日常性に介入する形で、瞬間的にはあるが、無限が浸透してくることになる。この瞬間、彼女の魂は、存在、時間を超出する永遠に参与しているといえるであろう。「金属性のわびしいひびきが空に尾をひいて、修道院の鐘が四つなるのが聞こえた。四時！エマには、永遠のむかしからずっとこのベンチにすわっているような気がする」(357/394)<sup>34</sup>。こうして、レオンとの恋愛における恍惚という一瞬への投企を繰り返すたびに、絶望と不安に苛まれ、そして、その欲望の不可能性の奈落の底から、静かに宗教性が介入し、瞬間的に永遠に参与するという波動が繰り返される。そして、この繰り返しの波動の振幅が、次第次第に狭く、そして激しくなっていく。

ついに、浪費を重ねたエマが、服地屋のルウルーに騙され、破産宣告を受けることは、現象面におけるこの小説のメルクマールである。このメルクマールを境に、己れの欲望が向かう先を、己れの欲望そのものが阻止する「欲望の自己矛盾」がはっきりと明示されることになる。実のところ、この破産宣告以前から、彼女は、レオンと「わかれる決心をする勇気もてないで、わかれを余儀なくするような破局が起こるのをねがってさえた」(364/404)<sup>35</sup> いう「欲望の自己矛盾」をすでに抱いている。

しかし、破産という「現実」に直面すれば、彼女の欲望は、そのまま「欲望の自己矛盾」に終始することではなく、金銭を工面しようと躍起になる。まず、現在の恋人であるレオンのもとにいくと、彼女はレオンにかれの法律事務所から金を盗むことまで仄めかす。「その燃え立つような瞳から悪魔的な大胆さがかがやいていた。まぶたがなまめかしく、そそのかすように細められた - 自分に悪事をそそのかすこの女の沈黙の意力におされて青年は弱気になるのを感じた」(371/415)<sup>36</sup>。ここでは、「欲望の自己矛盾」の前段階である「欲望の二重性」が見られるといえる。彼女の欲望は、現象の上では金銭に向かっているのであるが、その現象の背後には、自分の窮地を救ってくれる男の愛を、ほとんど念力のようにしても産出したい欲望が秘められている。ここにおいて、二つの欲望は、少なからず干渉し合い、打ち消し合う作用を果たしている。

次に、エマは公証人のギョーマンのもとを訪れる。この行為は、「欲望の二重性」から「欲望の自己矛盾」への架け橋であるといえる。彼女は、この男が彼女になんらかの恋愛感情を抱いているに違いないと踏んで金の無心にいくのであるが、金銭という「事物」は、たとえ彼女の存在を救うものであったとしても、彼女の意識のうちなる「自尊心」を凌駕するものではない。「あなたは、あたしの弱味にずうずうしくつけこもうとなさるのですか？あたしはこまっていますが、からだは売りません」(378/424)<sup>37</sup>。

最後に、エマは、元の恋人のロドルフのところに行く。ロドルフは最後の頼みの綱であるのだが、彼女は、かれが「留守であることを、ほとんど願うような気持ちだ」(383/432)<sup>38</sup> という「欲望の自己矛盾」をはっきりと抱くことになる。レオンへの金の無心においては、かれが身を滅ぼすことも厭わないほどの彼女への愛の存在を信じるのが、エマが「わたしであること」を指示しえた。ギョーマンのところでは、自分の自尊心を守ることでエマはエマでありえた。では、ロドルフの場合は一体何が彼女の存在を指示するために、彼女は、このような「欲望の自己矛盾」を抱くのであろうか。それは、破局に終わったものの、かつては存在した(と思っている)ロドルフとの「恋愛の思い出」という、現在における

「過去の現前」である。破産という現実を眼の前にして、未来に欲望が飛翔できない現在に直面して、想起可能なこの「過去の現前」が、彼女が彼女であることを指示するのである。しかし、もしも、この過去が不在であったならば、彼女の存在は自己崩壊してしまう。その予感を拭いきれないので、彼女は、ロドルフの不在を願うという「欲望の自己矛盾」を抱かざるをえないのである。そして、実際、この「恋愛の思い出」の不在に直面したとき、彼女の身体はいまだこの世界に存在しているものの、彼女の魂はすでにこの世界に存在してはいなかったのである。「そしてちょうど瀕死の重傷者が、血の流れる傷口から生命が消えて行くように感じるように、彼女は自分のからだから魂がこの恋の思い出を通ってぬけ出て行くように感じた」(387-388/438)<sup>39</sup>。

一方、「絨切り型」の生を享受していたシャルルは、エマの死後、この物語の最後の場面において、「エマの感性的認識」をもつに到る。その道程はどのようなものであるのだろうか。「だれかが死んだあとには、いつも茫然自失ともいえる状態が起こる。不意打ちにくるこの虚無感を理解し、それを納得するのはむずかしいのだ」(401/458)<sup>40</sup>。魂のこの「真空」状態を、わたしたちの意識は、自らの想像力を働かせることなしに抱えることはできない。そして、シャルルの「真空」を埋める想像力は、それが、エマの唯一の「存在証明」であるかのごとくに、エマとの結婚生活を象徴する彼女との結婚式の瞬間に収斂されていく。「《婚礼の衣装を着せ、白靴をはかせ、冠をつけて葬りたし。髪は肩のうえにひろげてたらず。棺は三重、一つは檜、一つはマホガニー、一つは鉛にすること。わたしにはなにもいわないでいただきたし。気は確かで、けっしてとりみだしません。一ばん上には緑色の大きなビロードの布をかけること。右はわたしの意向ゆえよろしくお計らいありたし》」(403/460-461)<sup>41</sup>。もし、シャルルが、この結婚式の際のエマのイメージを保持できたのなら、次第に薄れゆくこのイメージと共に、シャルルは再び生を享受することができたであろう。だが、偶然見つけたエマ宛のロドルフの数々の手紙は、シャルルからシャルルの過去を纂奪するのである。「シャルルは最後の一通までむさぶるように読み、すみというすみ、家具という家具、引き出し、壁のうしろまで捜した。すすり泣き、わめき、われを忘れ、狂人のようだった。箱の一つを見つけ、ふみつけて底をぬいた。恋文の山をひっくりかえすと、ロドルフの肖像がとび出して、シャルルの顔にぶつかった」(422-423/488)<sup>42</sup>。シャルルの過去は、実はシャルルではなくロドルフが所有していた。それゆえ、シャルルはロドルフに街でばったり出会ったとき、「エマの名残りを見ているような気もした。感嘆のような気持ちであった。自分がこの男になりたかった」(423/489)<sup>43</sup>という憧憬のような感覚を抱くのである。たとえ、想像上のものであったとしても、シャルルが自分の過去を奪回可能であったなら、かれはロドルフに対して復讐心を抱いたであろう。だが、シャルルの過去は完全にロドルフの手中にあって、それは、すでに、観照されるべきものであったのである。それゆえ、シャルルは、ロドルフに対して、「運命の罪です」(424/490)<sup>44</sup>と述べる。このとき、シャルルは、「満たされない」魂を、「満たされない」ままに抱えている。欲望が、未来へも過去へも浮遊することなく、現在において「欲望の自己矛盾」のままに釘付けになっている。これは、対象ではなく、自らが「苦悩の果ての美」となっている有り様である。自らが、宇宙の必然性の一部となっている有り様である。だが、「エマの感性的認識」が、このように、己れに対するものであったとき、わたしたちの魂は、身体の死をも道連れにする死滅を免れ得ない。それゆえ、なんら行為の介在なく、なんら身体に異変もなく、魂の死に身体の死が折り重なるようにして、シャルルはこの世界から消え去るのである。

「エマの感性的認識」を己れの中核にもって生きるとは、自らが内包するいかなる「型」を拠り所とすることなく、「満たされない」魂が、「満たされない」事実、に、直面し続けることにほかならない。「他者」は、「わたし」が「わたし」で「ある」ことのままにしておいてはくれず、また、「わたし」が「ある」のは、「他者」を「わたし」のものにすることによってである。だから、自明となっている明証性の一切を本当に括弧に入れてしまうとき、魂は、死が、「いま、ここに」あることに直面せざるをえない。しかし、どんなに運命を呪おうとも、どんなに運命から逃れようと意志しようとも、「そのために、

木の葉一枚うごくわけでもない)(403/461)<sup>45</sup>。この必然性の認識は、「エマの感性的認識」において、「わたし」という人称性を括弧に入れ、自らが宇宙の必然性の一部に「なる」というところまで押し進められなければ本当にはなされえない。そして、この「エマの感性的認識」の徹底を、実は、わたしたちの純粹意識は渴望しているのである。このことを、次章において「エマの死」に焦点を当てることによって探究してみたい。

### 三 死と永遠

エマが砒素を飲んでから死ぬまでの「エマの死の時間」の描写は、『ボヴァリー夫人』のクライマックスである。「エマの死の時間」は、エマが「存在」でも「非-存在」でもない、「存在」と「非-存在」との間に宙づりになっている状態の持続である。この「宙づり状態」において、魂は、自らを「満たそう」と欲望することも欲望しないこともできない。このとき、「わたし」は、徹底的に、「わたしならざるもの」によってしか指示されえない。

多くの論者は、エマの自殺の原因を、その現象のままに彼女の破産に帰している。だが、「満たされない」魂が「満たされる」ことを欲望し、そして、「満たされない」魂を抱く「わたし」の存在の底に広がる虚無の無限を覗き込む際に、瞬間的にはあるが永遠に与り、ついに、己れの欲望によって己れの欲望を打ち消す「欲望の自己矛盾」を把持しつつ生きえたエマは、ロドルフとの恋愛の破綻によっても瀕死の病から立ち直ったように、破産によっても死ぬような人物ではない。では、なぜ、彼女は「死への投企」を意志するのであろうか。「エマは魂がぬけてたたずんだ。…エマは自分がこんなにひどい状態になっているその原因、つまり金の問題のことをもうすっかり忘れたようになっていたからだ。ただ恋の傷みだけが心にあった。そしてちょうど瀕死の重傷者が、血の流れ出る傷口から生命が消えて行くように感じるように、彼女は自分のからだから魂がこの恋の思い出を通してぬけ出て行くように感じた」(387-388/438)<sup>46</sup>。エマの場合、シャルルが「自然的態度」において魂の死に身体の死が折り重なったようには、身体の死は訪れない。なぜなら、エマの意識には、「恋の傷み」という純粹意識にとっての異物が残存しているからである。純粹意識が、いかなる異物も孕まない「自己自身」であることを欲するのならば、そして、この異物がけっして後戻りすることができない「過去」のものであるのならば、「自己自身」であるためには、死へと投企せざるをえない。一切の自己意識が排除され、「真空」が「真空」として立ち現れることにおいて、純粹意識は「充溢」する。ここにおいて、認識と超越がひとつに重なり合う。

能動的／男性的な女性であるエマは、ソクラテス同様、毒を呷るという意志的行動によって死に与ろうとする。そして、「私の死の瞬間」までの時間の持続に、エマは徹底的に向き合わなければならない。「《ああ、死なんてたいしたことじゃない》」(390/442)<sup>47</sup> というエマは、自らの行為の結果である死という責任を自ら引き受けようとする決意において「存在する」。さらに、この「私の死の瞬間」までの時間は、彼女に贖罪の意識を可能にさせる時間でもある。「いままでの多くの裏切り、あさましかった行為、自分を悩ましていた数えきれぬ欲望も、これでケリがついた」(392-393/446)<sup>48</sup>。だが、生を欲望することも死を欲望することも叶わず、生と死の間、存在と非存在の間の「宙づり状態」を余儀無くされるとき、「わたしならざるもの」に向かう身体に釘づけになった魂は、「毒を呪い、ののしり、はやくケリをつけてくれ、と毒にむかってたのむ」(394/448)<sup>49</sup> のである。そして、エマが死相の出た自分の顔を鏡に映し、「わたしならざるもの」が「わたし」を指示することを彼女の魂自身がはっきりと認識するとき、魂はなす術もなく生死の境で震え続けるので

あった。そして、魂が死の境界を超える瞬間、彼女は、狂気の笑いのなかで、その「最後の存在」の瞬間を把持することになるのである。「そして彼女は笑いだした。乞食の醜悪な顔が、おばけのように、地獄の永遠の闇につっ立っているのが見えるような気がして、無気味に、狂いじみて、絶望的に笑った」(401/457-458)<sup>50</sup>。「わたしならざるもの」が「わたし」を指示することを、わたしたちの意識は正気では受け止めることができない。だが、「狂気の笑い」は、この極限に面しての純粹意識の表象であるといえる。「私の死の瞬間」において、存在の底に広がる非存在の巨大さに遭遇するとき、存在の有限性のばかばかしさ、そして、その滑稽さが露になるのである。死は生の対極ではない。死は生を微少な点として包み込むものなのである。

「エマの死の時間」の描写が長く克明であるのに対し、エマの死後、続いてシャルルの死後の事の成りゆきは、点的にわずか数行のうちに描写されている。エマとシャルルが死に、身寄りのなくなった娘のベルトを引き取った「叔母は貧しくて、暮らしをたてるためにベルトをある綿糸工場へ出して働かせている」(425/491)<sup>51</sup>。ブルジョアの家庭に生まれたベルトは、プロレタリアの身分へ転落せざるをえない。他方、即物的成功をおさめた薬剤師のオマーは、現象面においては旺盛を極め、ただひとつ「満たされない」願望であった勲章を貰うことをついに果たし、「かれは最近レジョン・ドヌール勲章をもらった」(425/491)<sup>52</sup> という短い一文でこの小説は締めくくられている。だが、この一文にはなんら説明がなく、「勲章をもらった」という「事実」が今にも風で吹き飛ばされそうな塵のようなものとしてただそこに「ある」だけである。

このことは一体何を意味しているのであろうか。「勲章をもらった」という記述のあとに続く空白は、読者に「虚無の深淵」の現前を提示しているといえる。だが、「勲章の授与」という「事実」はたんなる「事実」であるがために、エマがレオンとの一瞬の恍惚のあとに陥る「虚無の深淵」のように、永遠に連なる位相を有してはいない。そして、オマーの成功とベルトのプロレタリアへの転落が「事実」として留まるかぎり、この「事実」は容易に交換可能なものなのである。「存在する」のは人間だけであり、そして、その存在を美しくあらしめるのも、そうあらざらしめるのも、人間だけなのである。

『ボヴァリー夫人』には、終始一貫した典型的な「紋切り型」人間が登場する。それは、一章でみた司祭のブルニジアン師と、前述の薬剤師のオマーである。そして、この二人は共に、社会的「力」、権力に弱く、また、死を畏れるという性向を有している。オマーは、「性分として、名士からはなれることができず」(396/451)<sup>53</sup>、「シャルルの気の毒さを思うと、それと自分を対照してみても漠然と内心うれしい気持ちになる」(397/452)<sup>54</sup> という人物である。そして、「オマーは自分の主義の手前から坊主は死人の匂いにひきよせられる烏みたいなものだといった。僧侶の姿を見るのは、もう性分として我慢ならぬ。僧服は経帷子を連想させる。かれはその経帷子がこわいから僧服を憎んでいたのである」(398/454)<sup>55</sup>。このような「紋切り型」の人間は、あたかも、死の到来が「勲章の授与」によって免れているかのごとくの錯覚から逃れることができない。そして、「満たされない」魂が、「満たされている」との幻想を維持するために、権力に固執するのと同時に、死を恐怖する。そして、この死の恐怖とは、実は、生の恐怖にほかならない。「わたしがあゝ」とは「わたしならざるものがある」ことを感得しつつ生きることだからである。そして、この感得ができないひとびとは、一章でみた、エマを追い詰めるブルニジアン師のように、「わたし」のうちに「他者」を回収し、また、このことがどれほどの苦悩を「他者」に与えることになるのかということに気づくこともできずに、虚構の生を暴力的に享受し続けるのである。

エマが、「満たされない」魂を「満たそう」とする欲望の無限リレーを行っているさなか、このリレーは「わたしがな

てはならない。金箔がはげて手に残る」(355/391)<sup>56</sup>という「偶像崇拜の掟」は、「存在を覗き込んではいならない。死に捉えられる」ということを意味するからである。しかし、「偶像崇拜の掟を破ること」が、「わたし」が無限に参与しつつ「ある」、ただひとつの方法なのである。そして、また、わたしたちの認識欲は、無限に参与しつつ「ある」ことを欲する。そして、この欲望が、わたしたち自身を、「わたしがある」ことから「わたしならざるものがある」ことに移行させる。こうして、死が真理であるということが導き出される。そして、この死に直面して「狂気の飛翔」に与るとき、わたしたちは自己を、「他者」を、己れの想像力のうちに回収することなく、必然性の一部であることへの同意を果たして「存在している」。このとき、「苦悩の果ての美」が己れの内面に向けて「感じられる」。そして、これは、「わたし」を超えたもうひとつの存在、つまり神を、自らの内面において見ることにほかならない。わたしたちは、このようにして純粹意識において、「無償の愛」である「神の愛」に出逢う。

「エマの感性的認識」によって、死という真理に激突するか、あるいは、「形式的確信」に盲従して、この真理を虚偽で覆い尽くすかの選択がわたしたちに委ねられている。だが、この選択は、意志的選択によってなされるのではなく、自ずと自らが召喚されるという仕方によってである。そして、真理に直面し、「わたしがない」、「わたしならざるものがある」という魂の死を引き受けつつ生きるもののみが、たとえ、それが実際の身体の死と引き換えであったとしても、真に自由であるということ、フロベールの「言語の美」はわたしたちに提示しているのである。

## 結びにかえて

哲学の使命が、「普遍」において「特殊」への地平を切り拓くものであるとするならば、文学の使命は、「特殊」において「普遍」への地平を切り拓くものであるといえるであろう。この使命が徹底されたとき、「深い文学」、「偉大な文学」も、また、超越への志向を有しているのである<sup>57</sup>。

わたしたちが、『ボヴァリー夫人』を「超越の文学」としてと看做すことは、実は、サルトルが、この書を「アンガージュマンの文学」としてと看做す<sup>58</sup>ことと深いところで通底している。「エマの感性的認識」を中核にして生きるとき、わたしたちは、必然的に、社会的「力」から逸脱して生きることになる。社会的「力」に依存しているかぎり、この「力」は、どこまでも、「わたしがある」かのように思わせる「形式的確信」に盲従する材料を提供し続け、わたしたちの意識は常に「不幸な意識」である。「なにはともあれ、彼女は幸福ではなかった。これまで一度も幸福ではなかった」(357/393)<sup>59</sup>。だが、この社会的「力」から完全に解放されて生きるとき、つまり、周縁化された状態を引き受けて生きるとき、必然的に、「わたしがあること」が「わたしがないこと」と表裏一体であること、つまり、生と死が表裏一体であることを確信せざるをえない。このとき、わたしたちは、だれかに自分の苦悩を理解されたいという欲望を、だれにも理解されえないものとして己れに突き返す「欲望の自己矛盾」を抱きつつ、かつ、その欲望が過去にも未来にも浮遊しない状態において生きることになる。「わたし」という「人称性」が括弧に入れられるとは、このような欲望の位相を有して生きることである。そして、このとき、わたしたちは、「わたし」ではなく、うちなる「わたしならざるもの」によってのみ、宇宙の必然性の認識がなされることを知るのである。

フロベールは、まさしく、この境位において、作家に「なる」。かれは、この境位においてはじめて、「吐き気」を催す現実を「言語の美」に凝縮し、虚空に投げかけえたのである。フロベールのリアリズムはかくして誕生する。そして、か

れの「言語の美」の質が、わたしたちの「存在」を根底から揺るがすとき、わたしたちひとりひとりに、「ボヴァリー夫人はわたしなのです」という可能性が披かれているといえる。そして、もし、わたしたちひとりひとりが「ボヴァリー夫人」で「ある」のならば、わたしたちの存在そのものが「苦悩の果ての美」で「ある」ことを意味する。このとき、「自由」が「いま、ここに」、「ある」ということが、万人に普遍妥当的に、「美」という己れの存在から解き放たれた適意を通して「感じられる」。こうして、わたしたちは、自らの存在をもって、「紋切り型」の生を享受するひとびとに、かれらの生の虚構性と暴力性を気づかせ、かれらのうちなる本来の生の充溢を呼び覚まし、かれらひとりひとりが「ボヴァリー夫人」に「なる」、転回を促すことができるのである<sup>60</sup>。

☆『ボヴァリー夫人』からの引用は、Flaubert, *Madame Bovary* (GF Flammarion, 1984, Paris)を用い、日本語訳は、生島僚一訳『ボヴァリー夫人』(新潮文庫、1965年、2003年)により、原文と翻訳のページ数を記した。

凡例：(172/142) = (原書のページ数 / 翻訳書のページ数)

☆本文及び引用文中の強調はすべて筆者によるものである。

## 注

<sup>1</sup>フロベール、工藤庸子編訳、「1853年8月14日、ルイーズ・コレ宛の手紙」『ボヴァリー夫人の手紙』筑摩書房、1986年、265頁。

<sup>2</sup>Personne, jamais, ne peut donner l'exacte mesure de ses besoins, ni de ses conceptions ni de ses douleurs, et que la parole humaine est comme un chaudron fêlé où nous battons des mélodies à faire danser les ours, quand on voudrait attendrir les étoiles.

<sup>3</sup>西田幾多郎「哲学概論 附録一 哲学と宗教」『西田幾多郎全集 第15巻』岩波書店、1965年、174頁。

<sup>4</sup>前掲、176頁。

<sup>5</sup>incapable, du reste, de comprendre ce qu'elle n'éprouvait pas, comme de croire à tout ce qui ne se manifestait point par des formes convenues

<sup>6</sup>Elle aimait la brebis malade, le sacré cœur percé de flèches aiguës, ou le pauvre Jésus qui tombe en marchant sur sa croix.

<sup>7</sup>Elle n'aimait la mer qu'à cause de ses tempêtes, et la verdure seulement lorsqu'elle était clairsemée parmi les ruines.

<sup>8</sup>ここで、敢えて、日本の、自然主義文学ではなく、デカダンスの巨匠、太宰が『斜陽』(1947)の主人公かず子に言わせる独白とエマの欲望の様相との呼応を想起しておこう。「わたしは、お母さまはいま幸福なのではないかしら、とふと思った。幸福感というものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光っている砂金のようなものではなからうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持、あれが幸福感というものならば、陛下も、お母さまも、それからわたし

も、たしかにいま、幸福なのである。」太宰治『斜陽』新潮文庫、1945年、1988年、125頁。

<sup>9</sup> Emma songeait à son bouquet de mariage, qui était emballé dans un carton, et se demandait, en rêvant, ce qu' on en ferait, si par hasard elle venait à mourir.

<sup>10</sup> Jeanne Darc, Héloïse, Agnès Sorel, la belle Ferronnière et Clémence Isaure, pour elle, se détachaient comme des comètes sur l'immensité ténébreuse de l'histoire, où saillaient encore ça et là.

<sup>11</sup> Sa volonté, comme le voile de son chapeau retenu par un cordon, palpité à tous les vents

<sup>12</sup> les mollesses de la chair avec les dépendances de la loi.

<sup>13</sup> Comme la revanche en espoir de toutes ses impuissances passées.

<sup>14</sup> Ah!, ce ne sont pas les remèdes de la terre qu' il me faudrait

<sup>15</sup> Il y en a d' autres

<sup>16</sup> Je le suis des âmes

<sup>17</sup> Comme une statue sur un pivot

<sup>18</sup> La conversation de Charles était plate comme un trottoir de rue, et les idées de tout le monde y défilaient, dans leur costume ordinaire, sans exciter d' émotion, de rire ou de rêverie.

<sup>19</sup> Sa vie était froide comme un grenier dont la lucarne est au nord, et l'ennui, araignée silencieuse, filait sa toile dans l'ombre à tous les coins de son cœur.

<sup>20</sup> D' après les théories qu' elle croyait bonnes, elle voulut se donner de l' amour

<sup>21</sup> 己れの意志を発動できない状態にあるとき、極限に面しての決意の可能性を明示するフランクルの次の周知の言説は、このようなアポリアを付帯してしまうことを忘れてはなるまい。「ところで、具体的な運命が人間にある苦悩を課す限り、人間はこの苦悩の中にも一つの課題、しかもやはり一回的な運命を見なければならぬのである。人間は苦悩に対して、かれがこの苦悩に満ちた運命と共にこの世界でただ一人一回だけ立っているという意識まで達せねばならぬのである。何人もかれの代りに苦悩を苦しみ抜くことはできないのである。まさにその運命に当たったかれ自身がこの苦悩を担うということの中に独自の業績に対するただ一度の可能性が存在するのである。」V.E.フランク、霜山徳爾訳『夜と霧』みすず書房 1961年、184頁。

<sup>22</sup> Il trouvait, tous les soirs, un feu flambant, la table servie, des meubles souples, et une femme en toilette fine, charmante et sentant frais, ...

<sup>23</sup> C' était comme une poussière d' or qui sablait tout du long le petit sentier de sa vie.

<sup>24</sup> Rien ne lui manquait à présent. Il connaissait l' existence humaine tout du long, et il s' y attablait sur les deux coudes avec sérénité.

<sup>25</sup> ルネ・ジラル、古田幸男訳、第一章「<三角形的>欲望」『欲望の現象学<ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実>』法政大学出版局、1971年、1981年、1-58頁。

<sup>26</sup> Elle le jeta dans le feu. Il s' enflamma plus vite qu' une paille sèche. Puis ce fut comme un buisson rouge sur les cendres, et qui se rongeaient lentement. Elle le regarda brûler. Les petites baies de carton éclataient, le fils d' archal se tordaient, le galon se fondait ; et les corolles de papier, racornies, se balançant le long de la plaque comme des papillons noirs, enfin s' envolèrent par la cheminée.

<sup>27</sup> Un homme, au contraire, ne devait-il pas tout connaître, exceller en des activités multiples, vous initier aux énergies de la passion, aux raffinements de la vie, à tous les mystères? Mais il n' enseignait rien, celui-là, ne savait rien, ne souhaitait rien.

Il la croyait heureuse ; et elle lui en voulait de ce calme si bien assis, de cette pesanteur sereine, du bonheur même qu' elle lui donnait.

<sup>28</sup> Au fond de son âme, cependant, elle attendait un événement. Comme les matelots en détresse, elle promenait sur la solitude de sa vie des yeux désespérés, cherchant au loin quelque voile blanche dans les brumes de l' horizon.

<sup>29</sup> Elle ne demandait qu' à s' appuyer sur quelque chose de plus solide que l' amour.

<sup>30</sup> Il existait donc à la place du bonheur des félicités plus grandes, un autre amour au-dessus de tous les autres amours, sans intermittence ni fin, et qui s' accroît éternellement!

<sup>31</sup> Quelque chose d' extrême, de vague et de lugubre

<sup>32</sup> Elle pensait à lui, à Léon. Elle eût alors tout donné pour un seul de ces rendez-vous, qui la rassasiaient.

<sup>33</sup> Chaque sourire cachait un bâillement d' ennui, chaque joie une malédiction, tout plaisir son dégoût, et les meilleurs baisers ne vous laissaient sur la lèvre qu' une irréalisable envie d' une volupté plus haute.

<sup>34</sup> Un râle métallique se traîna dans les airs et quatre coups se firent entendre à la cloche du couvent. Quatre heures! et il lui semblait qu' elle était là, sur ce banc, depuis l' éternité.

<sup>35</sup> Même elle souhaitait une catastrophe qui amenât leur séparation, puisqu' elle n' avait pas le courage de s' y décider.

<sup>36</sup> Une hardiesse infernale s' échappait de ses prunelles enflammées, et les paupières se rapprochaient d' une façon lascive et encourageante;—si bien que le jeune homme se sentit faiblir sous la muette volonté de cette femme qui lui conseillait un crime.

<sup>37</sup> Vous profitez impudemment de ma détresse, monsieur! Je suis à plaindre, mais pas à vendre!

<sup>38</sup> Elle le[qu' il ne fût pas là] souhaitait presque.

<sup>39</sup> Et sentait son âme l' abandonner par ce souvenir, comme les blessés, en agonisant, sentent l' existence qui s' en va par leur plaie qui saigne.

<sup>40</sup> Il y a toujours, après la mort de quelqu' un, comme une stupéfaction qui se dégage, tant il est difficile de comprendre cette survenue du néant et de se résigner à croire.

<sup>41</sup> *Je veux qu' on l' enterre dans sa robe de noces, avec des souliers blancs, une couronne. On lui étalera ses cheveux sur les épaules ; trois cercueils, un de chêne, un d' acajou, un de plomb. Qu' on ne me dise rien, j' aurai de la force. On lui mettra par-dessus toute une grande pièce de velours vert. Je le veux. Faites-le.*

<sup>42</sup> Il dévora jusqu' à la dernière, fouilla dans tous les coins, tous les meubles, tous les tiroirs, derrière les murs, sanglotant, hurlant, éperdu, fou. Il découvrit une boîte, la défonça d' un coup de pied. Le portrait de Rodolphe lui sauta en plein visage, au milieu des billets doux bouleversés.

<sup>43</sup> Il lui semblait revoir quelque chose d' elle. C' était un émerveillement. Il aurait voulu être cet homme.

<sup>44</sup> C' était la faute de la fatalité!

<sup>45</sup> pas une feuille seulement n' en bougea.

<sup>46</sup> Elle resta perdue de stupeur,....Car elle ne se rappelait point la cause de son horrible état, c' est-à-dire la question d' argent. Elle ne souffrait que de son amour, et sentait son âme l' abandonner par ce souvenir, comme les blessés, en agonisant, sentent l' existence qui s' en va par leur plaie qui saigne.

<sup>47</sup> Ah! C' est bien peu de chose, la mort!

<sup>48</sup> Elle en avait fini, songeait-elle avec toutes les trahisons, les bassesses et les innombrables convoitises qui la torturaient.

<sup>49</sup> Elle maudissait le poison, l'invectivait, le suppliait de se hâter

<sup>50</sup> Et Emma se mit à rire, d'un rire atroce, frénétique, désespéré, croyant voir la face hideuse du misérable, qui se dressait dans les ténèbres éternelles comme un épouvantement.

<sup>51</sup> Elle est pauvre et l'envoie, pour gagner sa vie, dans une filature de coton.

<sup>52</sup> Il vient de recevoir la croix d'honneur.

<sup>53</sup> Il ne pouvait, par tempérament, se séparer des gens célèbres.

<sup>54</sup> L'affligante idée de Bovary contribuait vaguement à son plaisir, par un retour égoïste qu'il faisait sur lui-même.

<sup>55</sup> Homais, comme il le devait à ses principes, compara les prêtres à des corbeaux qu'attire l'odeur des morts ; la vue d'un ecclésiastique lui était personnellement désagréable, car la soutane le faisait rêver au linceul, et il exécrait l'un un peu par épouvante de l'autre.

<sup>56</sup> Il ne faut pas toucher aux idoles : la dorure en reste aux mains.

<sup>57</sup> ここで、哲学、文学、宗教学、政治学を縦横に横断する思索の跡を残した思想家シモーヌ・ヴェイユ(1909-1943)の思想の特質を的確にいいあてた、長谷正當の次の言葉を想起しておこう。この長谷の言説は、前述の西田の言葉を詩的言語で言い換えたものと看做すことができよう。「具体的なものを切り捨て、蒸発させてしまうが如き、いっさいの抽象的認識はヴェーユの具体的なもの、現実的なものへの眼差しによって破られている。しかし、思考はそこで具体的、現実的なものの不透明さのうちに屈服し、埋没してしまっているわけではなく、それを切り開く一種の抽象性を再現している。不透明さの中から、その不透明さを透視するものを把握するところに真の思考の働きがある」というのが、そのような思考がヴェーユの思想を明るものにしている。しかし、その抽象性や明るさは人間の自我に内的な根拠をもつ思弁的思考のそれではない。具体的なものの闇の底からの錯綜を断ち切る光があたかも、難問の解答の如くに引き出されて、超越への展望を開くものとなっているところからくる透明さなのである。」(強調筆者)、長谷正當『象徴と想像力』創文社、1987年、161-162頁。

<sup>58</sup> 「大切なことは、フロベールがある面において徹底的に自分を賭した<sup>アンガジェ</sup>ということである。…文学的アンガジュマンとは結局のところ、世界全体を、全体性を引き受けるという行為なのである。」J.P.サルトル、海老坂武訳『『うちの馬鹿』について』『シチュアション、X』人文書院、1975年、106頁。

<sup>59</sup> N'importe! elle n'était pas heureuse, ne l'avait jamais été.

<sup>60</sup> 『ボヴァリー夫人』を現代のパースペクティブにおいて敷衍するならば、この書の全体性は、男性が女性を、植民者が被植民者を、というフェミニズム、コロニアリズムの構図における抑圧者、被抑圧者が、共に、けっして幸福ではないということを明示しているといえるであろう。ここで、敢えて、彼/我、善/悪、二元論を、自らのディアスポラの生[アメリカ在住/パレスチナ人]を通して告発し続けたサイド(1935-2003)の「言語の美」とフロベールのそれとの照応を記しておきたい。「僕らがいるのはどうやら最後のフロンティアであり、本当に最後の空を見ているらしい。その先には何もなくて、僕らは滅びていく運命にあるらしいことはわかっているのだけれど、それでもまだ、僕らは『ここから、どこに行くのだろう』と問いかけているのです。僕らは別の医者にも診てもらいたい。『おまえたちは死んだ』と言われてただけでは、納得しません。僕らは進み続けたいのです。」エドワード・W・サイド、中野真紀子訳『ペンと剣』クレイソン、1998年、56頁。